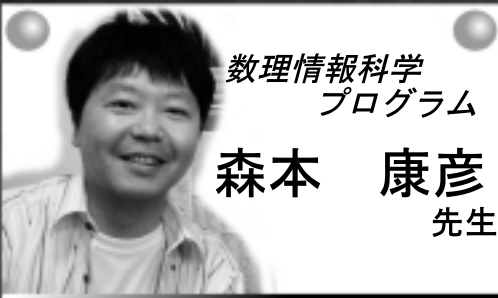
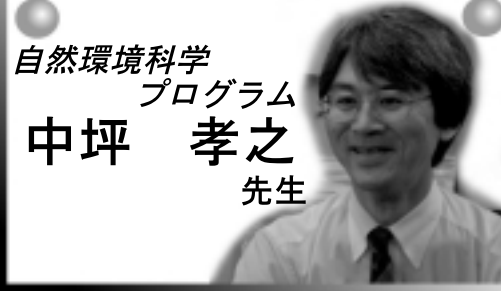
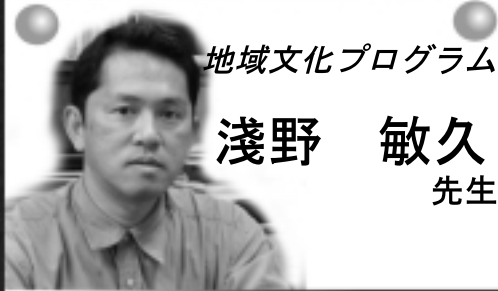


総合科学部 研究室紹介



総合科学部の研究室を
飛翔編集委員が取材！
新コーナー「一問一答」では
授業では分からない
先生の一面が見られるかも？
今号のテーマである
「環境・エコ」についての
話も伺いました。

研究室 A512

担当授業

人文地理学A (1)

地域地理学B (2)

文化と風土 (1・2)

コンピュータ地域研究 (3)

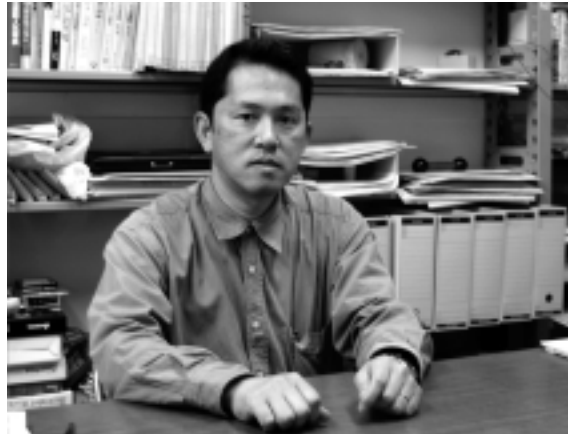
日本環境地誌 (4)

日本地誌研究演習 (5)

※ () 内はセメスター

オフィスアワー

木曜日 14:00~17:00



あさの
浅野

としひさ
敏久

研究室

地域文化プログラム

これが聞きたい！一問一答

◎趣味

自然観察・まちづくりの活動

◎自慢の品

旅行先のパンフレットや入場券

「ほぼ価値もないし自慢できるものでもないけれど、気づいたら集まったっていうね (笑)。」

◎好きな食べ物 何でもOK

「特にこれを食べないと禁断症状を出してしまうっていうのはないね (笑)。」

◎好きなテレビ番組

バラエティ・自然関係

◎好きな本 時代小説

◎好きなスポーツ 散歩

「よくその辺を散歩しています。あと、今はしていないけど、昔は陸上で競歩をやっていました。」

◎好きな言葉

人間万事塞翁が馬

◎広大の中で好きな場所

思案橋から寮までの、川沿いの道

「子供を連れてよく歩きます。季節が変わると様子も変わってくるし、そういうのがおもしろい。」

◎総合科学部で特徴的だと思う点

色々な分野の人がいるところ。特に、理系と文系の人と同じくらいずついるところ。

キャンパスを飛び出して将来の財産を見つけよう

研究内容

環境運動、つまり自然保護運動や環境教育の活動といった市民運動や市民活動を対象に、それらが地域とどういう関わりをしているのかを研究しています。専門は地理学なので、地理的な観点でやっているということになるかなと思います。

「地理的な観点とはどういうものですか？」

それは地域との関わり方、といった意味です。例えば海や湖の埋め立てをしようという話を持ち上がった時、生き物を守れといった声強い地域があれば、公共事業による雇用の確保が問題となる地域もあります。逆にこれらのことが問題にならない地域もあり、その違いは文句を言う人がいる地域の社会的あるいは経済的な状況を反映しているわけです。公共事業で言えば、地方では雇用問題は深刻ですが大都市などでは公共事業の削減に論点が行くでしょう。

自然を壊していくのは同じでも、環境問題の向き方は場所が違えば変わってきます。問題提起を研究者や行政がする場合もあるけれど、僕自身は住民や市民が何を言っているのかというところから問題の向き方を研究しています。地域の状況に応じて問題の成り立ちが違ってくるという観点に注目することが、「地域的・地理的な観点」から見えていくことになるのかなと思います。

研究室紹介

研究への道のり

大学に入った時から環境問題に興味を持っていました。当初は理系だったので、環境のことはもともと人間の側から見た方がいいのではないかなと思っていました。そこで、卒論では人文地理学の分野で霞ヶ浦の保全・保護活動を研究し、修論ではより社会運動を研究対象にしました。大学院の頃に自然保護運動などがどんなものなのか興味を持ち実際に活動に参加していくうちに、色々な知り合いができて情報が入ってくるようになったんです。それからドクターまで入ったんですが、途中で大学を辞めて就職しました。

大学にいた時に一番気になっていたのは、活動の中で労働力としては役に立っているとしても、やっている研究がその問題の解決につながらないということ。それに住民ではないのでその場所への思い入れの強さを共感できませんでした。問題の当事者になりたい気持ちが出てきたんです。コンサルティング会社に就職してまわりの計画などを作る仕事を六年間していました。その後広大から話が合ったので広大にやって来ました。

「大学と企業という立場での違いは？」

会社でも大学に来てからもまちづくりに関わっていますが、会社の場合は計画を作る会社だから計画を作れば仕事は終わりです。その意味ですごくドライです。その

計画が生きたか、生きないかには責任を持ちません。その代わりに色々な種類の話が全国から来て面白かったし、先進的な話もいっぱいありました。広大に来てからは逆に、大学周辺の仕事はたくさんあっても全国的な話とか国の仕事はめったにないわけです。扱うネタはローカルで遅れているところもあるけれど一年間で終わるようなことはなく、最後まで面倒を見られるようになりました。学生の頃になれなかった住民の立場で関わられるようになったのだと思っています。

研究の中での「総合科学」

そもそも僕は総合的なもの以外したことがありません。地理という学問がそもそも総合的なんです。僕の調べていること自体は社会学とか人文地理的な社会運動だけれど、調べている場面には理系的な言葉が出てきます。総合的に取り組むことは現実の社会問題に関わろうと思ったら絶対に必要だと思っています。

ヒューマン

そんなに熱心に環境に配慮した生活はしていないかもしれないけれど、昔からのこだわりで車を運転しないし免許も持っていません。だから歩きとか自転車とか公共交通機関しか利用しない生活をしています。周りには偏屈だと言われられないんだけど

(笑)。ある程度の不便さを受け入れる、そんなに抵抗感なく受け入れるのがやっぱりエコロジーなのかなと思いますね。本当に必要なものかどうか考えて買えばいいのかなと。

「現代の便利なライフスタイルを変えることができると思いますか？」

不自由だと思ったらできませんよ。やめたときのプラスをもっと自分なりに評価した方が良いです。そういうものが見つけられないと我慢したって感じになってしまうから。

学生に一言

僕自身が大学にいた時に地域の活動をしている市民団体などのところに行って、そこで色々なことを教わりました。大学の授業や本で学ぶこと以上に、その人から教わったこと、そこで知り合った人脈でもしろい経験ができたことがとても大きな財産になっています。だから学生に言いたいのは、大学の中だけにいるのではなく、外の経験を持てる場面があればできるだけどんどん出て行った方がいいということ。そうやって将来の財産になるようなものを見つけられるといいのではないかと強く思います。

【担当】20生 吉田 聡

研究室 C701

担当授業

教養ゼミ (1)

情報活用基礎 (1)

コンピュータ・プログラミング

(1・2)

プログラム技法 (3)

計算機基礎演習 (3)

プログラム言語論 (4)

※ () 内はセメスター

オフィスアワー

金曜日 16:00~17:00



もりもと やすひこ 数理情報科学プログラム 森本 康彦 研究室

これが聞きたい！一問一答

◎趣味

マラソン・観葉植物・鉄道の旅

「マラソンを始めたきっかけはダイエットでしたが、今は楽しんで走っています。また、僕はいわゆる「テツ」で、JRのおよそ6割は乗りました。」

◎自慢の品

ネックレス・参加したマラソンのゼッケン

「ただのネックレスじゃなくて、双子のマナカナちゃんから直接もらったものなんですよ。」

◎好きな食べ物 ラーメン

「東京・神奈川エリアの有名店は大体行きました。」

◎好きなテレビ番組

水曜どうでしょう

◎好きな有名人 大泉洋・上戸彩

◎好きな音楽 スガシカオの曲

◎好きな本 村上春樹・宮本輝の本

「東京に住んでいたころ、村上春樹とはご近所でした。会ったことはありませんけど。」

◎好きな言葉

Research is what happens to you while you're busy solving other problems.

(ジョン・レノンの「Life is ... busy making other plans.」から先生が作り出された言葉)

◎広大の中で好きな場所

ぶどう池のほとり

◎総合科学部で特徴的だと思う点

様々な分野の先生が1つの組織にいるところ

僕は、「研究のための研究」ではなく「社会のための研究」ができる学者でありたいと思っています。

研究内容

専門はデータマイニングです。わかりやすく言えば、データに埋もれた知識を発見してゆく学問です。広大に来る前は、IBMに勤めていました。IBMの当時のビジネスの柱は大型コンピュータでしたが、これらの大規模なコンピュータに蓄積されている大量の情報から、特徴的なパターンを自動的に発見し、それを知識として活用するために発展してきた技術のことを指します。この分野の研究成果をもとに、その後、グーグル等のネット検索ビジネスが誕生しています。現在では、ネット上の膨大な情報からいかに有用な知識を発見してゆかが大きな課題になっています。

研究への道のり

僕は広大の工学部の出身ですが、あそこは三年次から(総合科学部で言うところの)プログラムに分かれます。その過程で、三、四年次くらいからコンピュータに興味を持つようになりました。学生時代はESSというサークルで、英語でディベートをしていました。その中にはアメリカで仕事をしたいという人が多くいました。一方、僕は一度も外国に行ったことがありません。でもサークルの人たちは留学

研究室紹介

したり旅行に行ったりして、そういう人たちが帰ってきては土産話をしたりするんです。その影響から、やはり就職先はアメリカで働ける企業にしたいと思うようになりまして。なので、外国に行けそうな企業を考えてみたときに、IBMなら日本にあってなおかつアメリカの企業じゃないか、と。外資系の企業ですから、新入社員に帰国子女たちも多く、大変でした。そもそも飛行機にすら乗ったことがないんですから(笑)。ともかく、IBMでずっとコンピュータに関わってきました。

以前、大型コンピュータが黙っていても売っていた時代がありました。ところが、需要がみたされるにつれて簡単には売れなくなってきたため、新たな付加価値が必要になってきたのです。そこで、大量に情報を記録できて、必要に応じて参照できるだけでなく、情報の中から「こんな面白いことが起こってるよ」と教えてくれるようなコンピュータの研究を始めたわけです。今後は、たとえば「ヘミングウェイの何とかの作品について調べなさい」という課題があったとして、それに直接答えをくれるような情報の検索の仕方が登場するかもしれませんよ。「意味検索」と言われる検索です。これを制すると、グーグルを超えるような会社がそのうち出現してくるかもしれない

ませぬね。

研究の中の「総合科学」

社会のためになる研究というのは、すべて「総合科学」だと思っんですよ。大学の学者はちよつと反省しなくちゃいけないと思います。というのも、「研究のための研究」がわりと多い気がするんです。僕自身も、論文になればそれがゴールになるような研究をやってしまうことが多いんですね。いわゆる「既存の学問の枠」にピッタリ合うような研究です。しかし、「こうしたい」「こうありたい」という思いを持つことで、枠を超えていけると思います。たとえば僕がやってきた仕事の中に、病院の中の情報管理や、逃げた犯人を警察がいかに効率的に捕まえるか、という研究などがあります。社会に喜ばれるシステムを作ろうと思えば、犯罪プロファイリングをやるような人がよくある逃げ方のパターンを分析して、犯人の性格を踏まえて効率的にパトカーを配置するなどということができませぬね。そう考えると、世の中に存在する問題というのは、社会のためになるように考えると、何でも「総合科学」になるんです。

だから僕は、「研究のための研究」ではなく「社会のための研究」ができる学者で

ありたいと思っています。

エピソード

印刷用紙をなるべく取って置いて両面を使い、それが終わったらリサイクルに回すようにしています。やっている人も多いと思いますし、すごく当たり前なことというか、そんなに自慢できることではないんですけど……(笑)。

学生に一言

一年生の皆さんはこの先プログラムに分かれますが、それぞれのプログラムで学んで得る幅広い知識だけではなく、どこか一つ「ここに強い」という分野を持つてほしいと思います。

また、積極的に他のプログラムの授業も受けてみましょう。総合科学部は「+α」をたくさん持てる学部だから、将来出世できると思いますよ。そして、環境が許せば大学院にも進学して、その強みを育てていってほしいですね。その時に、総合科学部で学んだことも生かしていけるといいから。

【担当】20生 山谷 義貴

研究室 A125

担当授業

心理学B (1)

行動の科学 (1)

脳と行動の科学 (2)

行動科学統計演習 (3)

情報処理心理学 (4)

行動科学実習 (4)

※ () 内はセメスター

オフィスアワー

火曜日 13:00~15:00



入戸野 宏 研究室

行動科学プログラム
ひろし

これが聞きたい！一問一答

◎趣味

子供と遊ぶこと、研究

◎自慢の品

自分が書いた論文

◎好きな食べ物

カレー (辛いもの)

◎好きな有名人

ヴィクトール・フランクル

『夜と霧』の著者です。』

◎好きな音楽

ジャズ

◎好きな本

ポール・オースターの小説

◎好きな言葉

好奇心

◎広大の中で好きな場所

自分の研究室

「やっぱり、ここが一番落ち着くね (笑)。」

◎総合科学部で特徴的だと思う点

壁を作らないという理念をみんなが共有しているところ

大学は「夢」を語るどころだと思っています。

研究内容

色々なことをやっているのですが、専門は心理学です。心理学というと、人と人の関係を調べているというイメージが強いのですが、僕は人とモノの関係について調べています。人間が作ったモノ、例えば、コンピュータやテレビ、映画などのことです。そういうものに対して人がどのように関わり、どのように影響を受けているかを調べています。特に、脳の働きを脳波という形で記録して、モノを使っているときに脳はどういう反応をしているかを研究してきました。面白いものを見つけて夢中になっていたりときの脳の反応を調べることで、使っているときのモノの発明や開発につながる面白いなと思っています。

また、広告などのデザインで、人が見て好感を持つデザインとそうでないデザインを、脳の反応から区別できるような仕組みを作れたら面白いと思いますね。見た瞬間に脳が何をしているかに関心があり、いろいろ調べてきました。何かをパッと見て、じっと見つめる場合と、つまらないと思って次に行ってしまう場合では、脳の反応の仕方が違うんです。脳は見るべき価値があるかそうでないかを○・二秒くらいで判断して、ずっと見つめるか、それともやめてしまうかを決めているらしいということが、うちの研究室で行った実験から明らかになりました。

研究室紹介

研究への道のり

本当は、大学に入った頃は哲学者になろうと思っていました。だけど、哲学についての本を色々読んでいくうちに、これはかなわないと思ったんですね(笑)。歴史上、多くの哲学者が存在し、日本語に翻訳された本もたくさんで、これを全部読むのほども無理だと……。昔の人の考えを理解するだけでも精一杯だから、自分で何か新しいアイデアを出すまではいかないと思います。

そこで、自分でデータを集めることで、少しでもいいから人間に関する新しい知識を付け加えられそうな分野として、心理学を始めました。さらに、哲学からの反動ということで、特に即物的な脳に関する研究を選びました。これまでに何度もやめようと思いましたが、それなりに面白いので続けています。でも、脳の研究だけで終わる気持ちはないです。「人間とは何か」という哲学的な問いが僕の研究の根幹にはあります。

研究の中の「総合科学」

いわゆる「正統派」の心理学はあまりやっていません。専門家は興味を持たないけれど、一般の人が興味を持つようなテーマを専門技術を使って攻めていこうというのが僕のスタンスです。「面白くてナンボ」だと思っているので、まずは自分で面白い

と思えるか、そして人にその面白さを伝えられるかが決め手なんです。役に立つとか儲かるとかいう基準ではなく、人が素朴に面白いと感じてくれるような研究を目指しています。大学というのは「夢」を語る場所なので、実社会の損得勘定ではできないような研究をあえておこない、どれだけ人を知的に喜ばせられるかが使命だと信じています。ただし、面白いことと興味本意とは違う。お笑いと同じで、いいかげんにはなく、プロとして真剣に取り組んでこそ面白さが際立つと思います。

ヒューマン

さっき話したように、僕は人とモノとの関係を扱っているんですが、世の中にはいろいろな無駄なモノがありますよね。例えば、電化製品に、なくてもいい機能がついていると、その分、電気を余分に消費してしまう。企業の都合で付けられた本当は要らない機能を減らしていけたらと思えます。シンプルなモノの方が使いやすからです。複雑なモノを使いこなせずにはライラするの、精神的にもエコではないですね。シンプルなモノの方がうまくいくということを実証していくのが私の一つのテーマです。エコロジーを考えながら研究しているわけはありません。しかし、人とモノの関係を研究していくなかで、ゆくゆくは人間にとって優しいことと地球にとって

優しいことが調和する生活の仕方を見つけることが出来たらいいなと思っています。それが僕なりのエコに対する取り組みですね。

学生に一言

自分が面白いと思うテーマを見つけること、あとは人と違うことをやることですね。それが一番です。人と同じことをやっても、つまらないと思うんですよ。同じことをやっていたら、自分よりもすごい人に必ずどこかで会おうはずですし。もちろん、協調しないとイケない部分もあるでしょう。だけど、やっぱり自分のオリジナリティを出していつて、自分はこう思うとはっきり言えるようになってほしいです。そのためには口だけでなく、実力も高めていかないと格好悪いので、それが学びの原動力になります。

今の学生には自分のやりたいことが分からないという人が結構いますね。だけど、何でもいから自分が興味を持ったことを突きつめていけば、その分だけそのテーマに詳しくなっていく。いい意味でのオタクになって、そこから自分の専門性やオリジナリティを作っていけたら、自信もつくのではないかなと思います。

【担当】 20生 世良 真一郎

研究室 A817

担当授業

- ベーシック・ドイツ語Ⅰ (1)
- 宗教学A (1)
- ベーシック・ドイツ語Ⅱ (2)
- 宗教学B (2)
- 聖書の人間理解 (1・2)
- キリスト教思想 (3)
- キリスト教思想演習 (4)
- ※ () 内はセメスター

オフィスアワー

木曜日 12:50~14:20



辻

まなぶ

学

研究室

人間文化プログラム

これが聞きたい！一問一答

◎趣味 野球観戦

「夫婦そろって阪神ファンです。夫婦で見に行くのがとても楽しいんですよ。」

◎好きな食べ物

ラーメン、スパゲッティ。和食も。

「広島は食に恵まれていますね。」

◎好きなスポーツ アメフト

「高校時代、ラインバッカーをやっていました。」

◎好きな有名人

最近では阪神の金本知憲選手

「自分に厳しく人格者。そこがすばらしい！」

◎好きな音楽

青春時代…サザンオールスターズ

仕事中…ジャズをもっぱら聴く

マイブーム…平井堅

◎好きな言葉 実事求是

「事実の実証に基づいて物事の真理を追求するという意味です。」

◎広大の中で好きな場所

la place (中央図書館前のカフェ)

◎総合科学部で特徴的だと思う点

大所帯で、教員の数がすごく多いところ。

「1学年で見ると先生1人につき学生1人くらい。これってすごく贅沢です。全部の先生を知るのには難しいけれど、その気になれば自分の興味のある分野の先生と関わりを持てる可能性がすごく高い！このチャンスを大事に生かした方がいいですよ。」

過去から未来へとずっと続く時間、自分には見えていない空間や、人とのつながり、その中に自分がある。

研究内容

キリスト教、特に新約聖書についての研究を行っています。新約聖書に収録されている文書がどのような状況の下で、何を目的として書かれたかを考察すると同時に、一世紀のキリスト教が生まれてきた背景の分析もしています。新約聖書に書かれている内容を分析することと同時に、その背景の歴史状況を考えていくわけです。また、新約聖書のテキストが現代の我々にどのような意味を生み出すかという「解釈学」の問題にも関心を持っています。

研究への道のり

父親が牧師で、教会の中で育ちました。ですから、「キリスト教とは何か？」とか「聖書とは何か？」ということを変更して考えることも全くありませんでした。最初は牧師になるつもりでした。そのためには、キリスト教や聖書について、自分の言葉で理解し説明できるようにすることが必要です。牧師の資格を取るため、大学は神学部に進みました。

ある日のこと、大学の図書館の書庫に入って神学の本をずっと眺めていると、なんともしえない幸福感を覚え、研究が自分に合っているのではないかと思いました。それで大学院の前期課程、さらに後期課程

研究室紹介

へと進学することに決めました。後期課程の三年目の夏にスイス政府の奨学金に当たったので、ベルン大学神学部にて四年間留学し、博士論文を書きました。

日本に帰ってきて、一年間非常勤講師をした後、母校の関西学院大学で教えるようになりました。ただ、中学から三十年間関西学院にいたので、広大から誘いを受けたとき、外の世界を知るのもいいなと思い、来ることにしました。

研究とはおもしろいことだと教えてくれた本との出会いも、今の自分にとっては大きかったですね。中でも『イエスという男』（田川建三著、作品社「第二版」）という本は、イエスについて研究することの本当の魅力を教えてくれた貴重な一冊です。

研究の中の「総合科学」

特に意識してきたわけではないけれど、研究対象が人の生きるあらゆる場面に関わることなので、やっていると自ずと他の領域を意識せざるを得ないものです。宗教というものを、人間の「生」の営みの一つの局面に押し込めてしまったのは近代の誤りだと思えます。古代の人には、生活全般に宗教が関わっているという意識があったはず。もちろんそれが良くない影響を及ぼす場合もあるのだけど、宗教というもの

は元来、目に見えているものと見えていないものを統合的に意識する営みです。過去から未来へとずっと続く時間、自分には見えていない空間や、人とのつながり、その中に自分がある。そういう世界観を持つ。それが宗教の大事などころであり、そういう意味では、宗教は「総合科学的」なのではないかと思っています。

HUTTEN

時間と空間の見えない繋がりの中で生きていくというこの意識が弱くなり、目に見える部分だけで物事を捉えてしまうようになると、色々なところに歪みが出てきます。環境問題もまさにそう。目の前の事柄しか見ない姿勢が今の問題を生んだのです。見えない繋がりを意識し、その自覚の中で科学などの営みをしていく事が大事ではないでしょうか。この世界には、人知を超えた秩序があり、人間もその秩序の一部として生きる事が求められている。そのような生き方が人間には本来できるはずだ、この世界の中に人間がいるのは、それなりの意味や役割があつたことだという信念が、エコロジーへの取り組みも含め、この世界の中で何かをしていくことにつながっていくのだと思います。

学生に一言

自分がこだわりを持ってやれることを見つけて欲しい。あと、広大は残念ながら街から離れているから、大学の外部との関わりを持ちながら生活していく事を特に大切にしたいです。大学は街と切り離されて存在するものではないと思います。学生は、街の人たちと共にいることで育つのですから。

【担当】20生 野村 亮

研究室 C402

担当授業

世界の自然と環境問題（1）
生態学（2）
環境とエコロジー（3）
生物学実験法・同実験
（2・3）

※（ ）内はセメスター

オフィスアワー

月・火曜日 11:00～12:00



中坪 孝之 研究室

なかつぼ たかゆき
自然環境科学プログラム

これが聞きたい！一問一答

◎趣味

登山・園芸・釣り・フルート演奏・音楽鑑賞

「休日にはできる限り家族で過ごしたいと思っていますが、多趣味のためかなり忙しいです。」

◎特技 古武道・フルート

「実は広大古武道部の部長です。フルートは自己流。」

◎自慢の品 国内外の博物グッズ

◎好きな食べ物 魚介料理・お酒

「おいしいものは何でも歓迎。」

◎好きなテレビ番組

ダーウィンが来た

「家族みんなで見ています。」

◎好きな有名人

ナイジェル・マーヴェン（動物学者でプロデューサー）

◎好きな音楽 クラシック全般

◎好きな本 フェアブル昆虫記

◎好きなスポーツ

やるなら古武道、見るなら野球
「もちろんカープファン！」

◎好きな言葉

あなたが見たいと思う世界の変化に、あなた自身がなりなさい。（ガンジー）

◎広大の中で好きな場所

総合博物館・発見の小径

◎総合科学部で特徴的だと思う点

既存の学問の壁にとらわれなくてよいところ

自分の理想像ができれば、やるべきことは自ずと見えてきます。

研究内容

専門は生態系生態学です。極地をはじめとする各種の荒原生態系と、河口を含む河川流域を対象に、生態系を構成するさまざまな生物にスポットをあて、その生物の生理生態学的研究をベースに、生態系機能の解明をめざしています。最近では、北極の氷河後退域の生態系に対する環境変動の影響について特に力を入れています。

研究への道

物心がついたときから「生き物」好きで、いつも「生き物」のそばにいないと生きていけない子どもでした（笑）。小学校の中学年くらいのおきに『フェアブル昆虫記』を読んだからは、昆虫の採集と飼育にも熱中するようになりました。卒業文集では、将来の夢として「昆虫学者」を挙げています。中学・高校時代は、昆虫採集を続けながら、新たに海辺や高山など、厳しい環境に生きる生物に興味を持つようになりました。そして、大学から大学院にかけて、具体的に極地や高山の植物の研究を始め、現在の研究にたどり着きました。その意味では、自分の思い通りの方向に進んできたといえるでしょう。

研究の中の「総合科学」

私は、一九九〇年代の後半頃から、近いうちに日本でも「環境」の時代が来るであ

研究室紹介

ろうことを予感していました。そして、その頃から、大学教員として、若い学生に「環境」の大切さを伝えていく責務を感じるようになりました。そこで、自分で講義をもつようになってからは、自分の専門にとらわれず、「環境学」の授業をやるうと思つて、「自然環境基礎論」（現在の「環境とエコロジー」という授業を始めました。実際にやってみると、情報量が多く、まともるのも大変で、上手く伝えられないこともしばしばです。それでも、講義に影響を受けたという学生もいて、そんな話を聞いたときはとても嬉しくなります。

この「環境学」というのは、「T字型の人材」、つまり長い縦棒（専門性の深さ）と横棒（他分野とのネットワーク）を併せ持った研究者が求められます。このことをある人が、「環境学は、総合格闘技である」（※）と表現しているのを見て、とても納得させられました。というのも、何でも屋では駄目で、ひとつの必殺技が欠かせないのです。このように、「環境学」はかなりの厳密な意味において「総合科学」だと思います。私自身、講義のために広く情報を集めることで多くの知識を得ました。そのことが、自治体で環境に関する委員をする際にはとても役立っています。

エコについて

言行不一致は嫌いなので、私生活でも研

究室でも実践に励んでいます。私生活では、マイ箸やマイバックはもちろんのこと、生ごみをリサイクルして野菜を作ったりだとか、「フェアトレード（公正貿易）」（※※）の商品を意識的に買うようにしたりだとか、でき得る限りのエコに取り組んでいます。自分で新たなエコを考えること自体が結構楽しいんですよ（笑）。また最近、学者として学んできたことを社会に還元していくことにも意識的に取り組んでいます。その意味からも、地域への啓蒙活動などには、積極的に出かけて行きます。

例えば、毎年、黒瀬川で「釣り大会」を企画しています。現在では、一〇〇人近くが参加するまで大きな行事になりました。そこである保護者が「この川にも魚がいたんですね」と驚いていましたが、黒瀬川には、とっても大きいナマズだっているんですよ！ まずは、多くの人に「環境」について知ってもらうこと。身近な自然を知ること、好きになり、気にするようになります。「環境」に対しては、もちろん、国家規模・世界規模での取り組みも必要ですが、このように、個人としての取り組みも欠かせないのです。

研究室でも環境に関する実践活動を奨励しており、研究室の学生からなる団体「かっぱのおうち」は、観察会や「黒瀬川ガイドブック」の編集などを通じて、各種の賞を受けています。

学生に一言

最近の学生は、「今の自分に合う」ものばかりを外に探し求めて、「自分がこうなりたい」という目標がはっきりしないように見受けられます。総合科学部ではこれまでにないことができる環境があるのだから、それを自ら積極的に求めてほしいです。情報が氾濫している時代だからこそ、自身自身を見つめることが大切です。一〇年後、二〇年後に自分がどのようになっていたのか。自分の理想像ができれば、やるべきことは自ずと見えてきます。

（※）武内和彦ほか著 『環境学序説』 岩波書店 2002

（※※）グローバル化が進み、世界規模での低価格競争が行われるようになった今日、その中で翻弄される、立場の弱い生産者の生活改善と自立を目指す運動。自由貿易（フリートレード）のように価格を市場まかせにするのではなく、生産者の労働に見合った適正な価格で買い入れる。このことは、乱開発を防ぐ役割も果たし、「環境」を保護する取り組みでもある。

（詳しくは、中坪研究室のホームページサイト
<http://home.hiroshima-u.ac.jp/isubo/>をご覧ください）

【担当】19生 寺澤 潤哉